ベイブレード遊びにおける4歳児の自己充実と仲間関係

武宮道子*・友定啓子**

Self-fulfillment and Peer Relationship of 4-years-olds in "Beyblade-Play"

Michiko TAKEMIYA & Keiko TOMOSADA

(Received September 26, 2003)

1. はじめに

本研究では、幼稚園４歳児が「ベイブレード遊び」を通して、クラス内やクラス外の人との関わりの中で自己充実へ向かい、仲間関係を豊かに体験していく姿を、記録に基いて考察する。

幼稚園教育は、幼児期にふさわしい生活の中で、自由な遊びを中心として幼児の発達を実現していくことを目標としている[1]。遊びは何か具体的なものを学習させるために行われると、とたんにその生命性を失ってしまう。とはいえ、幼児は遊びの中で多様な体験をし、結果的に何かを学び発達していく。遊びを教育の方法として採用する場合の原理的な矛盾を考慮した上で、遊びの発達における有効性を機能させるには、保育者が個々の子どもの遊ぶ姿に即して、そこに含まれる発達の内容を読み取ることができなければならない。

「ベイブレード遊び」は、「３Ｄジオシェイプス」（市販平面ユニット、ジオジャパン社製）を組み立てて作るこま遊びである。この平面ユニットは、他の組み立てブロックのように、さまざまのものを立体的に作り上げることができる。子どもたちはこれを用いてこまを作り出した。ジオシェイプには、一辺が6.5cmの正三角形・正方形・正五角形・正六角形の４種類のユニットがあり、それぞれ６種類の色がある。ベイブレードは、その中の五角形１個と三角形８個のユニットを使って組み立てられ、テトラ型の頂点を中心にして自由に回すことができる。ユニットは大きな容器に入れられて、２年前から年長のクラスに置いてある。年長児が作り出しさまざまに遊び込む姿を見て、年中の子どもたちも作りはじめた。（写真１）

こまは、古くから世代を越えて伝承されてきた玩具である。こまの魅力は、自分自身の魂を吹き込むような思いで回転させるところにある。子どもたちは自身の分身とも思えるこまでの勝負を繰り返しながら、相手を打ち負かそうと、自分だけの強いこまを作ることに専念し、回す技量に磨きをかけていく。ここで取り上げる「ベイブレード」は形こそ現代的であるが、遊びに含まれるおもしろさは、伝統的なこまとほとんど同様である。

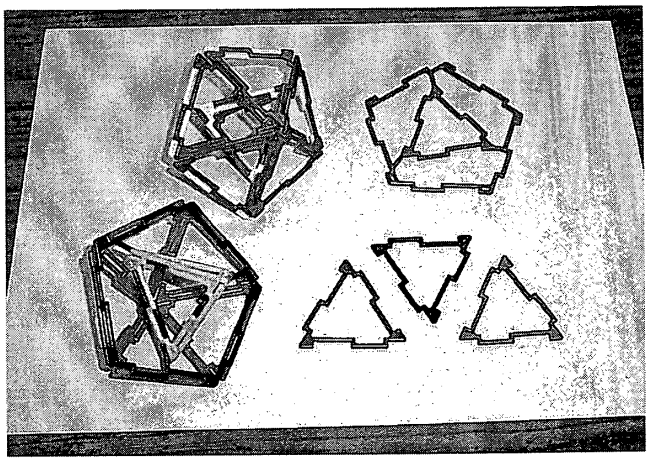

写真１　3Dジオシェイプスを用いたベイブレード

＊山口大学教育学研究科　　＊＊山口大学教育学部

さらに「ベイブレード遊び」が園内の遊び文化として広がった要因の一つとして、TVアニメ番組「ベイブレード」の流行と、市販玩具としても多種類のものが出回っていることの影響がある。子どもたちに共有のストーリーがあることで、仲間としての親密感も満たされ、より強いこまを作るという勝負や遊びへの思い入れの強さにも影響している。

また、平面ユニットを使ってベイブレードを組み立てる面白さがある。子どもたちは、ユニットの色を選んだり、組み合わせを考えたり、ユニットの色や形にも親しみながらベイブレード遊びへの思いを膨らませている。

年長児にひかれて遊び出した年中児たちは、はじめはクラスの仲間の中で遊びへの思いを深め、自己充実を果たし、さらにクラスを超えて異年齢の友だちと出会いながら、遊びの伝承や新たな関わりを広げてきた。ベイブレード遊びを通した年中児の自己充実と、仲間関係の深まり・広がりを、保育参加記録をもとに見ていく。

2. 研究方法

国立A幼稚園年中組（男子14名女子16名　計30名）にて、参加観察を行った。期間は2002年4月から12月まで、毎週2回、保育開始から終了まで。参加観察終了後、記録を作成し、ベイブレード遊びに関するものを抜き出し、考察を加えた。

3. 記録及び考察

Ⅰ　クラス仲間との関わりにおける遊びの深まりと自己充実

ⅰ　仲間関係に自己が位置づく

記録①　“一緒のやつ、作りたいか？”　　2002. 10. 24

卓也が「学くんに作ってもらった。」と言ってベイブレードを見せてくる。その後、学と真介がやって来て、「これ、同じ色。」と、二人お揃いの緑色と白で作ったベイブレードを見せて言う。私「ほんと、お揃いだね。」学が「同じに作ったんよ。だから仲間なんよ。」と言う。そして、それを横で聞いている卓也に、学が「一緒のやつ、作りたいか？作ってもいいぞ。」と言う。卓也は「うん。」と頷いて、学と真介に近寄る。学は「よし、おれについて来い。教えてやる。」と、真介と卓也に言い、三人は学を先頭にして、ジオシェイプスのある星組（年長クラス）の保育室の方へと走り出す。　　（幼児名は仮名、以下同じ）

真介と学は、お揃いの色のベイブレードを持ち、さらに私にそれを伝えることで、自分たちが仲間である喜びを共有し、確認している。「一緒のやつ、作りたいか？作ってもいいぞ。」と言った学は、卓也も同じ喜びを求めている気持ちを汲んでおり、それを自分たちが受け入れられること、その関係への喜びをも表わしている。また、卓也にとっては、仲間にこの関係を認められたことは喜びであり、仲間との親しい関係に自己が位置づくことの安心感でもある。また、子どもたちは、仲間のしるしをもつために、みんなも見ているテレビ番組や流行の物を持つなどして共通の話題をもとうとする。子どもたちは、仲間関係に自己が位置づくことで、自分の存在感を確認しているようである。

ⅱ　自分を信じて挑戦する

記録②　“ぼく、すごい？”　　2002. 11. 7

悟はベイブレードをあっというまに作り上げ、「見てて」と言って回し出す。青、赤、白の

色合いがとても綺麗で見とれてしまう。私「うわあー、すごい」悟「ぼく、すごい？ぼくの、すごいでしょ？」私「そうだね、悟くん回すのも上手だけど、ベイブレード作るのも上手いな。私も作ってみたくなってきたなあ。悟くん、教えてよ。」悟「いいよ。ぼく　先生の分、作ってあげるー。強いのと弱いの、どっちがいい？」私「強い方が嬉しいけど？」悟「ぼくのより弱いのしかだめ。ぼくの次に強いのでいい？」私「２番目に強くしてくれるの？」悟「そ、これこうやってねえ、赤と青で強くなるんよ。」悟は私の分も瞬く間に作り上げてしまう。

赤色のユニットを組み込んだベイブレードで戦っているクラスの子たちに、私が「前よりも強くなったね。」と感心していると、悟は「それ、ぼくが最初だったんよ。ぼくが赤いの作ったからね。みんなぼくとおんなじにしたいみたい。」と言う。

記録③　“色は関係ないんよ”　2002. 12. 12

大輔がやって来て、「貸して。」と、私の持っているベイブレードを回し、「ね？大くんうまいやろ？大くんがやったら強いよ。」私「そうだね。」大輔は「色は関係ないんよ。どれでもねえ、強い人が勝つんよ。」と言う。私「そうか。じゃあ、練習して上手になった人が、ベイブレード強いんだね。」大輔「でも・・違うよ。先生はへたくそだからね。大くんが回してあげたら勝てるよ。」私「そうかあ。このドラゴンボリケードって強そうに見えるけど、私が回してもへたくそだから、よく回らないんだあ。」真介「色は強いときもあるよ。でもね、色は強くてもね、真介が回したら強いよ。・・先生？」私「うん？なに？」真介「先生ってね、へたくそだね。」と、にっこり笑って私の顔を見る。私「ははは・・やっぱり？そうかあ。でもがんばって真介くんみたいに上手になるぞ。」真介「うふふ。」大輔は「回す人が強かったら強くなるんよ。色はどれでもいいんよ。」と繰り返す。

記録②の悟は、友だちのベイブレードや対戦のようすをしっかりと見ていて、自分のアイディアや創造力を発揮し、それが仲間たちに認められ、浸透していることを確認している。認められることで自己が充実し、何度か失敗を繰り返しながらも、「絶対にできる」という自信をもって挑戦し続けることに喜びを見出す。

記録③の大輔と真介は、これまで色と強さとの関係にこだわっていたが、回す自分の技量に関心を向け始めている。子どもたちは「練習なんてしてない。はじめっから強いの！」と言って日々本当に楽しみながら遊んでおり、その積み重ねでいつのまにか回す技術も上達している。「こうやったら強くなる」などと回し方に工夫をこらし、技に関心を向けていく。そこには「練習」という苦労のある捉え方はなく、自分自身を信じて意欲を燃やし挑戦する子どもたちの姿がある。

iii　遊びに豊かさを求める

記録④　“翼くん、これは？”　2002. 12. 2

翼は真介の白と赤で組み立てたベイブレードを見て、「白はねえ、女の色よ！白は弱いよ！」と言う。私「へえ、何色が強いとかあるの？」翼「あんねえ、先生の見せて。あ、それ強いよ。赤があるから強いよ。」私「ここ？（五角形）」翼「そ、赤は一番強いよ。」真介「翼くん、これは？赤あるよ。強い？」翼「それ？白があるからちょっと強いけど弱い。」すると健司も、「翼くん、赤が強い？赤が強いんよねえ？違う？」と聞く。翼が頷くと、健司は再び作る作業を続ける。その後健司は、私のベイブレードの色に赤を入れた方がいいと勧め、作り変えてくれる。

記録⑤ “悟の作ったやつはね、強いんよ” 2002. 12. 12

悟がお休みの日。真介が私に完成しているベイブレードを手渡し、「それ、緑と黒だから強いよ。あのね、ドラゴンボリケーノって、一番強いやつなんよ。」と言う。私「強いやつって、色が決まってるの？」真介「うん。でもね、先生はへたくそだからね。それね、悟が昨日作っといたやつよ。」「悟くんのは強いんだよ。」と言う。そして健司も「緑と黒が強いときもあるんよ。悟の作ったやつはね、強いんよ。」と言う。

記録④の翼であるが、想像力が豊かで、仲間のリーダー的存在である。日頃から新しいものに取り組み、試行錯誤しながらも挑戦している。そういう翼を見ている周囲の子どもたちは、難しそうだけど自分も挑戦してみたいという気持ちが沸いてくる。

記録⑤の悟は、日々一人でも熱心に星組へ通って、作ったり回したりと懸命に取り組んでいる。子どもたちは、熱心に取り組み腕を熟練させている悟を認めて尊敬しており、それは悟への憧れの気持ちでもある。

優れた友だちに憧れている子どもたちも、「先生へたくそだね。こうやるんだよ。」と、積極的に自分からお手本となろうとしており、他者に認められる自己へと向かっている。その上で、友達がどれだけ熱心に取り組み努力しているかもしっかり認め、そこから自分たちが学んでいる。

また、子どもたちは、自分と友達の違いに気付きながらも、集団で遊ぶことを求め、その上でお互いに楽しめる関係や一人ひとりの充実を求めている。だからこそ遊びの新たな展開を心待ちにしている。そうした期待と展開の繰り返しがあるからこそ、子どもたちは飽きることなく遊び続けることができる。子どもたちは、率先して新たな魅力的な展開を提示する翼に期待し、自分たちが認める悟に好奇心を抱き、さらに積極的に取り入れることで、自分たちの遊びの充実、自己の実現へと生きていく。

iv トラブルの中での共感

記録⑥ “貸してって言わんとだめ・・・” 2002. 12. 12

大輔「なんでとるんか！」健司「黒がいるの！」私は二人の方を振り向き、様子を伺う。大輔「とらんでもいいじゃんか！」健司「だって、足りんかったからしょうがないだろ！」二人は複雑な表情で言い合っている。私「どうしたの？」大輔「健司くんが取った。」私「そう。それ、大輔くんは使うつもりでいたんだ？」大輔「うん。でも勝手に取った。」私「健司くん、それね、大輔くんが使おうとして置いてたんだって。知ってた？」健司「だって、使いたかったもん。」私「そう。健司くんも使いたくなったんだ。だけどそれ、もらうときね、大輔くんになにか言った？」健司「だけど、あと１個だけだから。」私「あと１個だけで欲しくなるかもしれんけどねえ・・他の人の持ってるのが欲しくなったらどうしたらいいやろうねえ・・。」大輔「なんで勝手にとるんか！」健司「そんなに怒って言うな！」。するとそれまで二人の様子を見ていた卓也が、「貸してって言わんとだめ・・。」と、健司ではなく私の方を見て遠慮がちに言う。健司「かして。」「・・もう言ったからいいだろ！」大輔「はじめに勝手に取るな。」健司はプイッとそっぽを向きながら黙る。大輔は不満げにじーっと健司を睨む。二人を囲んで遊んでいた周囲の子どもたちにも言葉がなくなる。私「健司くんそうだね。また今度だれかのが欲しくなったらね、はじめに『かして』って聞いてみたらいいかもね。そしたら、大輔くんも嫌な気持ちじゃなくて考えられるんかな？」大輔「うん。勝手にとるのはいけん！」周囲の

子どもたちは、黙って自分のベイブレードを回しながら、お互いの状況を窺い何かを思っているようす。

ものをめぐるトラブルであるが、ここでは当事者の二人の問題としてはなく、周囲の子どもたちが当事者の気持ちを理解している場面としてとらえたい。子どもたちは、自分のベイブレードに対して自分自身であるかのような思いを寄せている。だからこそ、取られた大輔の気持ちもわかり、最後のユニットを取ってしまった健司の気持ちもよくわかる。周囲の子どもたちがステレオタイプなトラブル解決に進まず、黙り込んでしまったところにその思いを見ることができる。このようなトラブル場面で、子どもたちは個々の充実の思いを背景に、当事者の気持ちを推察し共有する。また、仲間と関わり合いながら自己充実を果たしてきているからこそ、仲間の思いを理解し共有することができ、仲間に親しみや思いやりの気持ちを抱くこともできる。

Ⅱ　異年齢の出会いにおける自己発揮

ⅰ　年長の保育室へ行く

記録⑦　“ベイブレード、返しに行ってくる”　　2002. 10. 17

お帰り前の時間、正和が私の背中をトントンとつついて、「ベイブレード、返しに行かなきゃ。」と言う。私は「そう。正和くん、今日はベイブレード借りて遊んでたんだ？正和くん、返しに行くこと、ちゃんと覚えてたんだね。行っておいで。」と言う。正和は、外で遊んでいる間しまっておいたベイブレードを取り出すと、再び私に「これ、どうする？」と尋ねる。私「これ、どこから借りてきたの？」正和「だれか忘れたけど・・保健室。」私「保健室で星組さん（年長クラス）の誰かと遊んでから借りてきたんだ？」正和「うん。星組の人にね・・でも名前わからない。」私「そうか、じゃあ、Y先生に聞いてみる？何か知ってるかもしれないね。」と言う。正和は、保健室の入り口で立ち止まる。私「Y先生いるね。正和くん、何て言おうか？」と、正和に尋ねる。正和はしばし考えて、「ありがとうございました。」と、Y先生にベイブレードを渡す。Y先生は「正和くん、ちゃんと返しに来てくれたんだ。ありがとうね。またベイブレードしに遊びにおいでね。」と答え、出口のところまで付き添い、手を振りながら見送って下さる。

数日後、正和がお帰りの時間にまた私の背中をつついて「ベイブレード、返しに行って来る。」と言う。私「うん。行っといで。」正和は一人で星組の保育室へ駆けて行く。正和は星組に入る直前に私の方を振り向いた。私は正和と目が合い、そこで正和から“これから入るよ”とメッセージがきたように感じ、“うんうん”と相槌を打つ。正和は星組の保育室の中へ入っていく。

その後も、正和はベイブレードを返しに行くとき、「返してくる。」と一言言ってから出かけるが、もう、私の方を振り向くことはない。正和は、星組にベイブレードを返すときのやり取りが分かってくると、次第に自分だけで返しに行くことができるようになった。そのころになると、返しに行くことに慣れていない同じクラスの友だちがいるとき、正和は僕が分かるからと、一緒に返しに行ってあげようとする気持ちも持てるようになる。

正和はもの静かな性格で、仲間に入るときの交渉や仲間とのトラブルに直面する経験が少ない。また、一つひとつ保育者に確認してから行動し、決まりごとは忠実に守ろうとする。幼稚園中の子どもたちの間で広がったベイブレードの遊びは、様々な人たちとのやり取りの多様な

場面に直面する機会になる。異年齢クラスとのベイブレードの「貸し借り」で、なかには「めんどくさい」「また明日やるから」と返しに行こうとしない子もいる。それは、日々夢中になって遊び込んでおり、決まりごとや先のことにとらわれない子どもたちの自然な姿でもあり、そこには仲間関係や遊びの深まり・広がりや個々の充実がある。そこへはまだ到達しきれていない正和の場合、遊びそのものとは別のところでの「貸し借り」を通して、こうすればいいんだなと気付き自ら行動するようになったことは、人とのやり取りにおける戸惑いを乗り越え勇気や自信を得ることへのワンステップである。正和なりの自己の充実へと向かっており、正和自身の課題の克服へ結びつくものである。担任の先生は、自分自身の意志で判断をすることが難しく他者に依存しがちな正和が、決まりごとや過ちへの恐れという硬い殻から気持ちを解き放つ時を見通して、少しずつ自分自身の思いを実現することを願って温かく見守っておられる。

ii　他者との出会いにおけるより明白な自己の実現

記録⑧　“こうだよ。こうやるんよ”　　2002. 12. 5

花組（年少クラス）の男の子たちが風組へやって来て、「ベイブレードやらしてください。」と声を揃えて言う。そこにいた風組の学、悟、至は応えようとしない。そこで私が「はあい？」と応え、「ねえ、学くん、悟くん、花組さんがなにか言ってるよ。」と声をかける。学は「あ？なに？」と顔を上げる。渉「ベイブレード、ぼくにもやらして。」学は何も言わず、ちょっと考えているようである。私「そうか、渉くんたち、ベイブレードをやらせて欲しくて来たんだね。」渉と修二が頷く、私「そうなんだって。どうする？」学「いいけどー。できんの？」修二「ぼくつくる！」私「そう、つくれる？」渉「ぼく、つくれる。」私「そう、よかったね。風組さん、いいよーって言ってくれたね。」渉と修二が、箱の中からユニットを取り出しはじめる。学は、時々ちらちらと目を向けているようだが、特に声をかけず、自分のベイブレードを扱っている。

渉と修二は、ユニットを何個も取れるだけ取り、色や形を考えて選んでいるようではない。学が「なんで四角・・。ベイブレードじゃない・・」と呟く。私「お、修二くんと渉くん、いろんな色のを集めたね。ベイブレードできそう？」修二は「自分でつくれる！」と言い、集めたユニットをかき混ぜたり数えたりする。渉が、「ぼく、できない。・・・やって。」と、私に四角形と六角形のユニットを差し出してくる。私「そう？じゃ、風組の学くんに教えてもらおうかあー？先生より上手よ。」学は「かして。」とすかさず身を乗り出し、「これ、ベイ箱にするん？ベイブレードじゃないん？」と渉に聞く。渉「ベイブレード。」学は「あんねえ・・・これ、四角じゃーできんよ。・・・これ、この三角のやつよ。かして。何色？何色のがいいん？」などと始める。渉は足下の三角形のユニットを色はこだわらずに学に手渡していく。

ベイブレードが完成し、渉が床で回し始めると、順一（年長児）が「なんだ、そのベイブレードの色！」と言う。渉のベイブレードは、黒と緑と青と黄色が混じっている。渉は自分のものを言われているとは気付いていないようす。私が「渉くん、どう？」と聞くと、渉は「ぼく、回せる。」と言って挑戦する。順一がまた、「そのベイブレード、変なの！」と言う。私は「渉くん、気に入ってるみたいだよ。」と順一に言う。順一は、私の持っている青一色のベイブレードを見て、「先生のやつ、青色だけー？」と言う。

学は、私と渉がよろよろと回している横で、「こうだよ、こう。」と言って回して見せる。学は「じゃあ、こんなのできる？」と、ベイを逆に立てて「きのこ回し」をする。

年長の和夫が風組に一人で入ってくる。通過中の様子。ふと足を止め「なんなん、かして。

こうやるんよ。」と私のベイブレードをきのこ方式で回してみせる。私「お、さすがだねえ。和夫くん、コツを教えてよ。」和夫「コツは、こう。」と再度回すが、数回失敗し、「いつもは1回でなるけど。見とって。こう！」と続ける。和夫が回すのを見ながら、学は黙って私や和夫から見える位置に出てきて、きのこ方式で回し続けている。時々、私と学の目が合う。何度か失敗しながらもやって見せようとする年長の和夫と、その横で全く失敗せずに見事に回す年中の学がいる。

年少の子どもたちは、ベイブレードを作って実際にやってみたいと思うが、ベイブレードを組み立てる形の条件が分からず色へのこだわりもない。このような年少児の様子を見た年中の子どもたちは「そうじゃないのに・・。」と、何か一言言わずにはいられない思いが膨らみ、さらには自分が教えてやりたいという気持ちが湧いてくる。そこには、自分たちで深めてきた遊びがそのまま受け継がれて欲しいという願いがあり、自分たちの手で確実に伝えていくことの充実感がある。

学は、年上の和夫に挑戦的な言葉こそ出さないものの、見事に回せる自分をアピールしようとしている。ベイブレードに寄せる自信をしっかりと持っているからこそ、一つ年上の人を相手に主体的に挑戦する意欲がかき立てられている。

iii　他者との関わりにおけるしなやかな自己実現

記録⑨　“やっぱり赤いのにしたいから”　2002. 12. 12

赤色のユニットを集めていた夢子が、6つの赤いベイブレードを持っている渉（花組年少児）に目をつけ、近寄る。夢子「ねえ、赤、貸してくんない？」と、渉に聞く。渉「これね、ぼくね、ぼくが作ったからね。」と、ダメだとは言わないが、自分の元から離したくなさそうに、両手で6つのベイブレードを抱える。夢子は黙って渉のベイブレードを見ているが、何か言いたげにしている。夢子はもう一度ジオシェイプスの入れ物の方へ戻り、「もう赤がなーい。・・うーん・・。」と言う。私「夢子ちゃんは赤色のが必要なの？」夢子「夢ねえ、全部赤にして作りたいんよー。でも、もう1個もない・・。」私「そう。だから渉くんに貸してってお願いしに来たんだね？」夢子「・・・うん。」私「渉くん、夢子ちゃんが貸してくれる？って、お願いに来たのはね、夢子ちゃん今ね、赤いベイブレードを作ろうとしてて、赤色が足りないからなんだって。渉くんがたくさん持っているみたいだからね、ちょっと貸してもらいたいなあって、思ったみたいだよ。」渉は「ぼくね、これね、花組さんに持っていくんよ。だからちょっと・・。」と言って立ち上がり、6つのベイブレードを両手で抱えて後ずさりながら移動し始める。渉は「ちょっと、ぼく行かなきゃだからね。花組で遊ばなきゃいけないからね、持っていかなきゃね・・。」とこちらに向かってしゃべりながら離れていく。夢子は渉を見送り、渉が保育室から出て行った後に「あれ、ほんとに全部使うんかねえ？」と呟く。私「渉くんがたくさん作ってたの、花組のお友だちと一緒に遊びたいんだろうねえ。夢子ちゃんどうする？」夢子「別の色にしようかなー。だってしかたないやろう？」私「そっか。別の方法もあるね。」しばらくして、夢子は「ねえ。夢、やっぱり赤いのにしたいから、風1（隣のクラス）から借りて来てもいい？」と私に聞いてくる。私「そう。じゃあ、風1に行ってお願いしてみたら？」夢子は「ちゃんと返すから。行ってくる！」と、風1の保育室へ走る。

年少花組の渉たちは、日々風組の人たちが遊んでいるのを見ていて、同じように花組の友だ

ちの分まで作ってみんなで遊んでみたいという思いがある。渉にとって自分の作ったベイブレードを譲ることは、自分の思いを諦めることで、それは受け入れられない。お互いに相手をよく知らない同士という関係のなかで、渉は自分の思いを実現させなおかつ相手の気持ちを損なわないような、3歳児にしては非常に柔らかな対応をしている。

夢子も、赤一色のベイブレードを完成させたいと思い、渉から譲ってもらおうと試みたものの、年下の渉の譲れない思いを汲み取り、自分の思いとの間で揺れている。そして、渉に対し強いては交渉せずにいる。そして少しの妥協をも試みながらも、自分の思いにしっかりと向き合い、さらに他の方法を考えて別の解決をめざし、自分の思いを実現させている。

4. まとめ

ベイブレード遊びを通して仲間関係が深まり・広がる中で年中児が自己充実していく姿をみてきた。子どもたちは、仲間に認められることで自己の存在感や達成感を確認し、自信を持って新たな挑戦へと意欲を燃やしている。また、他者も認め、それを自己充実へと生かしている。さらに、関わり合って充実する体験を積み重ねてきているからこそ、仲間の思いを理解し共感することができ、仲間に親しみを感じて思いやりの気持ちを抱くことができる。そこに共に育ち合う子どもたちの姿がある。

遊びの深まりや仲間との関わり合いの面で不十分な子どもも、異年齢とのやり取りを通して自己の課題を乗り越え、自己充実に向かっている。また、異年齢の相手との出会いによって、自分たちの遊び文化を受け継いで欲しいという思いや挑戦的な意欲に駆られる姿、互いの充実を大切にするしなやかな関わり合いがある。

ベイブレード遊びのなかで、幼児は自己充実を果たし、仲間との関係を深め、広げながら、仲間と共に生きる自己を見つめ、相互充実することに喜びを見出している。

伝承的な遊びは、技能の習熟を伴いながら、自己を充実させ、仲間関係の中でそれを実現していくという、ものとの関係、自己との関係、人との関係において、豊かな発達の体験を内包した遊びである。

参考文献

(1) 小川清実、子どもに伝えたい伝承遊び－起源・魅力とその遊び方－、萌文書林、2001
(2) 本田和子、子どもたちのいる宇宙、新潮社、1980
(3) 幼稚園教育要領、文部省、1998